かささぎ 通信 第68号

2018年 5月 11日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

二〇一八年四月の「森三郎の作品を読む会」では『森三郎童話選集かささぎ物語』所収の「お染」を読みました

「お染」は、『赤い鳥』昭和7年12月号初出の作品です。この話の内容については、勝尾金弥氏が「森三郎氏追悼」（『ふるほん西三河』第48号、平成6年8月）の中でまとめられた文章を紹介します。

「お染」は祖母からよく聞いた話だと、はじめに断ってある。村はずれの老夫婦の家にある夜訪れて来た孫娘を、裏の竹藪にすむ古ムジナが化けて来たのかと疑い、結局見破ることができず、土ふまずのできものに軟膏を塗って帰してやる。そのすぐ後に本物のお染が来て、やはりムジナだったと分るが、じいさんの好物のアケビを置いて行った気持ちを察し、むしろいとおしく思うという、しみじみと余韻が残る好編である。兄銑三氏も回想の中にムジナの話をあげており、はじめの断り書の通りに伝承が素材になったものだが、ムジナのお染が帰って行く迄の経過がきわめてスムーズで読者をぐっとひきつける。

勝尾氏の指摘のように、祖母から聞いたという断り書きからはじめる方法は、「かささぎ物語」（初出『赤い鳥』昭和6年12月号）の導入でも見られた手法です。森家の銑三・三郎兄弟は、小さい時に両親からお話を聞いた体験をよく述懐しています。そういう経験が創作のきっかけになっていたような気がします。

さて、この「お染」は、単行本『かさゝぎ物語』（昭和17年）に「向かふのお寺のお駒さん」という題名で収録されていますが、全体的に書き直しがあります。四月の「読む会」ではこの二作を読み比べてみました。

「お染」では、竹藪のわきの古いわら屋根の小さな百姓屋、竹藪の中の大きな椿の木、椿の実を拾い集めて村の油屋へ売りに行くというように、順におじいさんたちの暮らしぶりを描くところから始まっています。教室で先生にお話を読んで貰う子どもたちが少しずつお話の世界に入り込んでいくのには、効果的な表現方法ではなかったかという声が会員から多く出ました。一方「向かふのお寺のお駒さん」には、祖母から聞いた話だという断り書きがありません。また、おじいさんたちが住んでいる家のあたりの詳しい情景描写はカットして、直接おじいさん・おばあさんとムジナとのやりとりに入っていくという描き方です。また、「お染」では「とてもわるいムジナ」となっているところが、「向かふの・・」では「とてもいたづら好きのムジナ」となっています。そしてタイトルの「向かふのお寺のお駒さん」は、ムジナか本当の孫娘かと調べるために歌わせたわらべ歌の冒頭の一節です。その歌を上手に歌うムジナが、長年おじいさんたちの家の傍に住んでその生活ぶりを見ていたことをうかがわせる象徴的なタイトルと言えます。

両作品の結末にもおもしろい違いがありました。「お染」では遠くの田んぼから蛙の声がひびいて「あしたは雨になるのでしょう。」と言い、さらに梟の「トオコン、〳〵」という鳴き声で終わらせています。しかし「向かふの・・」は、「明日もいゝお天気でせう。裏の藪でノリツケホーセが泣き出しました。」と終わっています。柳田國男の『野鳥雑記』（昭和15年）には、「ノリツケホーセ」とは梟の啼き声の聞きなしで、「あしたはお天気だ、洗濯物に糊を附けて乾すによい日だ」という教えだと書かれています。三郎は『野鳥雑記』を読んだ上で、「向かふの・・」の結末を「晴れ」に変えたのではないでしょうか。ムジナと人間との関係にほのぼとした温かみが感じられます。狐と人間とのつながりを題材にした三郎作「目ぐすり」にも通じる思いではないでしょうか。

次回「森三郎の作品を読む会」（第二金曜日に刈谷市中央図書館で開催）
平成30年6月8日（金）午後1時半～3時半
「めぐりあい」「赤鬼青鬼」「梅の木」（『森三郎童話選集かささぎ物語』）